

チリ共和国との震災教訓の共有（河北新報社「むすび塾」実施支援）

掲載日:2013年12月11日

(C)河北新報社

児童と備えの意識共有

「タルカワアン(チリ)
むすび塾@チリ・タルカワアン」

【タルカワアン(チリ)
東野滋(報道部)】

河北新報社と国際交流基金が南米チリに合同で派遣している巡回ワークショップ「むすび塾」訪問団は9日(現地時間)、タルカワアン市のサンタ・クララ小を訪れた。

同校は2010年のチリ大地震津波で浸水被害を受けた。東日本大震災の被災者2人が体験談や教訓を語り、備えの意識



浸水被害の小学校訪問

を共有した。

訪問団は児童2人に保護者、教員を交えた昼食会に参加した。現地の住民たちは、チリ大地震津波に襲われた時の恐怖や、家が壊れた様子を涙ながらに説明した。

チリでは日本に比べ、防潮堤が整備されていない。防潮堤の有効性を尋ねられた石巻市の主婦佐藤麻紀さん(42)は「震災の津波は防潮堤を越えて襲ってきた。あてにせず、高い所に逃げるのが大事だ」と強調した。

宮城県南三陸町の後藤一磨さん(66)は、チリから町に贈られたモアイ像に触れ、「モアイの代わりに私が来ました」とあいさつ。「町の子もたちは一生懸命勉強し、復興を担おうと頑張っている」と話した。

現地の子どもたちには、日本から持参した折り紙や折り鶴を贈った。同日、タルカワアン商業高でも生徒と交流した。

一行は10日、首都サンティアゴで在チリ日本国大使館や国際協力機構(JICA)チリ支所を訪問し、ワークショップの成果を報告する。



折り紙と折り鶴を児童代表に手渡す佐藤さん(左)
9日、タルカワアン市のサンタ・クララ小